

ライトニングトークとパブでの立食パーティーによる コラボレーション促進の試み

Promoting collaboration through lightning talks and buffet parties in pubs

岡本真*¹
Makoto Okamoto

大向一輝*²
Ikki Ohmukai

*¹ アカデミック・リソース・ガイド株式会社 *² 国立情報学研究所
Academic Resource Guide Inc. National Institute of Informatics

ARG Cafe and ARG Fest are quarterly networking meetings aiming at promoting collaboration among participants. In this article, we discuss the design concepts, results, and problems of ARG Cafe and Fest.

1. ARG カフェ&ARG フェストという催し

1.1 ARG カフェ&ARG フェストの概要

ARG カフェ&ARG フェストは、筆頭著者がインターネットの学術利用をテーマに編集・発行するメールマガジン ACADEMIC RESOURCE GUIDE (以下、ARG) を母体で開催しているオフラインイベントである。2008年7月12日に第1回を東京・秋葉原で開催したのを皮切りに、以降3ヶ月に1回のペースで以下のように全国各地で開催されている。

	開催地	開催日時	参加者数
第1回	東京	2008-07-12	約60名
第2回	横浜	2008-11-28	約70名
第3回	京都	2009-02-21	約50名
第4回	仙台	2009-06-20	約50名
第5回	大阪	2009-08-24	約50名
第6回	横浜	2009-11-12	約70名
第7回	筑波	2010-02-13	約50名

ARG カフェ&ARG フェストは、大きくはインターネットの学術利用に関心を抱く人々を対象にした催しであるが、主催者としては単なるイベントではなく、参加者同士が有機的に結びつき、その後のコラボレーションへと発展していくことを企図している。本稿では、この企図を実現するためにどのような場の設計をしているのかを紹介し、あわせてこれまでの参加者間でどのようなコラボレーションがなされているのかを報告する。なお、ARG カフェ&ARG フェストについては、長神風二ら参加者による参加報告がすでに出ており、本稿ではそこではふれられていない点を中心に議論を展開する。

まず、ARG カフェ&ARG フェストの概要をまとめておこう。ARG カフェ&ARG フェストは、常に2部構成をとっており、第1部のARGカフェでは約10名の参加者がライトニングトークと称する5分間のショートスピーチを行う。第2部のARGフェストでは会場をイギリスの伝統的な酒場であるパブ (Pub: Public House) に移して立食形式での懇談を行う。

1.2 ライトニングトークの形式と内容

ライトニングトークでの演題は、運営母体であるARGのテーマであるインターネットの学術利用に関わる内容としているが、実質的には特に制約はない。たとえば、直近の第7回では以下

のような演題となっている。

- 「博士のタマゴの異常かもしれない愛情: また私は如何にして心配するのを止めて図書館情報学を愛するようになったか」
- 「大学生・院生にとってのブログによる学術コミュニケーションの可能性 pt.2: 実践報告編」
- 「存在を消される資料たち—NDL エロ本納本調査から考えたこと」
- 「IRLib.net—機関リポジトリ横断検索システムの試作」
- 「Augmented Campus—拡張するキャンパス構想」
- 「元・公務員ジェネラリストはどう生きるべきか?—かつて司書だった筈のシステム屋の呟き」
- 「電子書籍時代の図書館の財産とは何か?—Shizuku2.0の発表に代えて」
- 「図書館情報学若手の会と図書館情報学苦手の会と図書館苦手の会が必要」
- 「デザインから考える図書館の今、これから」
- 「ラーニング・コモンズ@筑波大学は電子図書館の夢をみるか」
- 「ソフトウェア開発の楽しさを叫ぶ in ARG カフェ」
- 「非情勤司書という行き方」

持ち時間は厳守とし、開始と同時にストップウォッチを演者に渡し、5分経過してアラームがなった時点で強制的に終了となる。トーク中、個別質疑は行わず、約1時間ライトニングトークだけを続けた後にまとめて質問を受ける形式となっている。

1.3 パブでの立食パーティーの形式と内容

第2部のARGフェストは過去7回中6回を、注文の都度に支払いをするキャッシュオンデリバリーを採用しているパブで行っている。会場では極力椅子は使わず、立食形式とする以外は特にイベントは設けず、参加者同士の自由な歓談に委ねている。第1部のARGカフェは参加費を徴収しないが、ARGフェストでは参加費を徴収している。徴収するのは食費相当分で1500円から2000円程度に設定し、飲み物は各自が別途支払う形式をとっている。

2. ARG カフェ&ARG フェストの設計

2.1 ARG カフェの設計

ARG カフェ&ARG フェストは、丸山眞男や黒木玄の問題提起に示唆を得て、様々な知識を持つ異質な人々が出会う場を創り出し、出会った人々同士のコラボレーションを促進すること

連絡先: 岡本真, アカデミック・リソース・ガイド株式会社, 神奈川県横浜市中区太田町 2-23 YMBC 6F-A, arg.editor@gmail.com

を企図している。このような目的を実現するためのイベントとして名刺交換会や懇親会といった催しがあるが、実際に多くの方が知りあう機会になることは少ない。特にすでに一定の知名度を持つ人が場の花となることはあるが、現時点において知名度が低い人やコミュニケーションに苦手意識を持つ人は、他人と知り合う機会が必然的に少なくなる。また、仮にコミュニケーションが円滑に進んでも、互いに未知の人物同士である場合、自己紹介から話を始めなければならず、限られた時間では多くの人と知り合うことは難しい。

ARG カフェでは、この問題を解決するためにライトニングトークを実施している。毎回参加者を約 50 名と見込み、そのうち 10 名に自薦、もしくは依頼によりトークを担当してもらう。ライトニングトークは限られた時間ではあるが、逆にそのために簡潔にして要領を得た話が求められる。自分自身について、また自分の関心や活動について、聴衆がもう少し詳細を聞きたいと思う程度までしか、言わば話の導入部しか話せず聞けない 5 分という時間を設定することで、ライトニングトークの登壇者への聴衆の関心を高めることを狙っている。このような名刺代わりの自己紹介としてのライトニングを行うことで、全参加者の 2 割が自己紹介を終えていることになる。

ここで意図しているのは、参加者を二分することである。仮説としては、自己紹介を終え、かつ聴衆から関心を寄せられている 10 名と、自己紹介をまだしていない 40 名という 1 対 4 関係をつくりだされることになる。この狙い通りにいけば、続いて開催する第 2 部の ARG フェストに移行した際、ライトニングトークの登壇者 1 名に対して平均 4 名が自然と集まり、自己紹介や名刺交換を経て、聞き足りないと感じた点に関する質問を糸口にコミュニケーションが始まっていく。

2.2 ARG フェストの設計

以上の流れを受けて開催する第 2 部の ARG フェストは、立食形式であり、かつ飲み物をその都度カウンターで購入するという形式を重視している。着席の懇親会ではしばしば見られることだが、椅子とテーブルがあると参加者の席の移動が難しく、最初に着いた席を離れることは難しい。仮に席の移動が可能であったとしても、その場の雰囲気や阻害しないように席を立つことは容易ではない。

だが、立食かつキャッシュオンデリバリー式が基本的なスタイルとなっているパブの場合、そもそも席という概念がないため、いま自分が加わっている話の輪から出て、別の話の輪に加わることがはるかに容易である。また、飲み物を飲み終えると、自分でカウンターに足を運び注文をしなくてはならない仕組みであるため、お代わりの注文を口実に話の輪を離脱できる。通常、ARG フェストは 2 時間の開催となっており、おおむね飲み物を 2 回程度再注文することになる。つまり、最初に加わった話の輪から離脱し、別の輪に加わることが 2 回は可能となり、合計で 3 回別々の話の輪に加わることが可能である。1 つの輪が平均して 5 名程度で構成されるとすれば、自分をのぞき各 4 名、合計 12 名と 2 時間の間にコミュニケーションを図ることができることになる。

このような仮説に基づき、ARG フェストは設計されており、一般的な名刺交換会や懇親会等の催しよりも、他の参加者と密なコミュニケーションが行え、その結果、その後に続く関係が構築されやすく、所期の目的である参加者間のコラボレーションの促進につながると考えている。

3. ARG カフェ&ARG フェストの成果と課題

3.1 ARG カフェ&ARG フェストの成果

では、以上のような考察を持って設計した ARG カフェ&ARG フェストは、どのような成果を挙げているだろうか。第 4 回を終えた後の 2009 年 8 月 15 日から 31 日までの半月間に第 1 回から第 4 回までの参加者のうち、メールでの連絡が可能な 177 名に以下の 3 設問のアンケートを実施した。

Q1:ARG カフェ&ARG フェストで知り合った方と、その後、何らかのコラボレーションに発展したことはありますか。

※参考例: イベントに招いた/招かれた/一緒にイベントした、執筆を頼んだ/頼まれた/一緒に執筆した 食事や飲みものに誘った/誘われた など、難しく考える必要はありません。
Q2:「すでにある」場合、その具体的な内容を具体的に教えてください。

Q3:コラボレーションの有無に関わらず、お尋ねします。今後、ARG カフェ&ARG フェストで出会った方、あるいは今後の参加において出会う方と、どのようなコラボレーションができることを期待していますか。

結果、61 名から回答があり(回収率 34%)、42 名(うち登壇者 22 名)が「何らかのコラボレーションに発展した」と回答している。なお、ライトニングトーク登壇者は全員が「何らかのコラボレーションに発展した」と回答している。Q2 のコラボレーション事例としては、イベント開催、共同執筆、原稿依頼、施設見学、資料貸出、講演依頼、業務相談、就職相談、出版企画、別刷り交換、プロダクトレビュー依頼、会員入会、ネットワーク強化、花火大会、飲み会、食事が挙げられ、Q3 の今後への期待・要望としては、情報交換、共同研究、共同発表、共同事業、研究協力、サービス開発、イベント開催、ネットワーク強化、業務受発注、会員入会が挙げられた。

間もなく開催する第 8 回の終了後に再度同様のアンケートを実施する予定だが、少なくとも第 1 回から第 4 回までの参加者の約 23%については、ARG カフェ&ARG フェストが目的とするコラボレーションが果たされている。

3.2 ARG カフェ&ARG フェストの課題

上で見たように実施されたコラボレーション事例と、今後への期待・要望には、まだ乖離がある。共同研究、共同発表、共同事業という言葉が示すように参加者はより本格的なコラボレーションを求めていることがうかがえる。共同での作業に進むには、一定の時間が必要とも考えられるが、1 回の出会いから共同での取り組みにつながられるのか、場の設計のさらなる改善を図る必要があるだろう。また、回を重ねるに従い、常連の参加者が増える中で異質な他者を常に取り込んでいけるか、という新たな課題も浮上しつつある。

参考文献

- [長神 2009] 長神風二, 岡本真, 佐藤亜紀, 佐藤亜紀子: 学術情報の自由な集いが生む新たなつながり 第 4 回 ARG カフェ@仙台”, 情報管理. Vol. 52, No. 7, 2009, http://joi.jlc.jst.go.jp/JST.JSTAGE/johokanri/52_426.
- [丸山 1968] 丸山眞男: 大学共同セミナーを企画して, 丸山眞男集 第九巻 1961-1968, 岩波書店, 1996.
- [黒木 1998] 黒木玄: 様々な知識を持っている人達が出会える場について, 黒木のなんでも掲示板, 1998, <http://www.math.tohoku.ac.jp/~kuroki/keijiban/Motivation.html>.